

『身延論叢』第二十六号 編集後記

身延山大学仏教学会の機関誌『身延論叢』の第二十六号「特集 身延山の文化財」をお届けいたします。

一、掲載内容について

本誌は本会会員の投稿をもってこれを発行するものです。令和二年（二〇二〇年）は、編集委員らによる依頼原稿を含め、会員内外の九名の先生方よりご投稿いただいております。本号には、身延文庫・身延山久遠寺・七面山敬慎院と文化財関係が三本、日蓮教学関係が二本、法華章疏関係が二本、福祉学関係が一本と、巾広い分野のユニークな研究成果が揃っていますので、是非ともご覧の上、忌憚のないご意見賜れますと幸甚に存じます。

さて、身延山大学仏教学部編『仏教芸術が創る世界』（山喜房佛書林、二〇二〇年三月）における「編集後記」や二〇二〇年五月九日発行の『文化時報』の記事「教養選書が完結」（二二面）において触れさせていただきましたように、本学の有する知的財産を社会に還元してゆくプロセスの一つとして、本学が主催する各種公開講座等の内容をまとめて、これを一冊の本にして世に送り出す際のツールとして活用させていただきました『身延山大学教養選書』（全四巻）が令和元年度をもって完結することになりましたので、本誌ではかような機能の一端を担うべく、令和元年度身延山大学身延公開講座「身延山の文化財」（全五講座）の中から三講座をセレクトして、本誌の冒頭より三本を「身延山の文化財」に関する論攷で編成し、もって特集号とさせていただきます次第です。それでは掲載内容について簡単に紹介させていただきたいと思っております。

中尾堯先生の論攷は、「身延文庫」の淵源と構成を歴史的に明らかにすることを目的とし、日蓮聖人から近世中期（十八世紀前期）に至るまでの「身延文庫」の整備に関する歴史を、典籍の分類と管理の方面から考察を加えています。

有賀祥隆先生の論攷は、令和元年九月に山梨県指定有形文化財に指定された身延山久遠寺所蔵「絹本着色仏涅槃図」の特色

について明らかにし、伝来、筆者、制作年等を知り得る本絵画が高く評価されるものであることを指摘しています。

渡辺洋子先生・功刀悠先生の論攷は、「七面造」と称される七面山本社敬慎院の社殿と、建築雛形にみられる「七面造」という、異なる形状をもつ二つの「七面造」に着目し、豊富な資料と実測調査によって近世から現在に至る七面山敬慎院の建築について考察を加えています。

庵谷行亨先生の論攷は、「日蓮聖人教学における仏法の弘通」について体系的に究明するため、全体を三部に分けて論じた第三回目として、日蓮聖人遺文を通して法と時と師を視点とした仏法弘通の次第について詳細に検討を加え、末法という時に本門の大法を弘める本化上行菩薩の弘教のあり方、日蓮聖人自身の立場と自覚を闡明にしています。

桑名法晃先生の論攷は、深草瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』に収録され、新出史料となる「聖人御系図御書」の史料紹介を行なうとともに、これまで不明であった『聖人御系図御書』の伝来等に新たな知見を加えています。

金炳坤先生の論攷は、敦煌文書で、利都法師に帰されるという『法華経義記』の八点のうち、四点(BD14693, P.4567, BD01670, S2439)が同本の離片であることを論証し、六朝時代の法華教学史を再構築し得る史料を提示しています。

中井本勝先生の論攷は、吉蔵撰『法華論疏』に対する一連の訳注研究の一部にして、本稿での範囲は『大正』を基準にすれば、七九二頁の中段から七九四頁の中段までに該当します。因みに茲は十七種の法華経の異名が説かれるところです。

檜木博之先生の論攷は、本誌の前号に次ぐもので、調査期間を単年度から一年延長し、「介護支援専門員のケアマネジメントプロセスにおける課題」について分析・考察を行ない、本研究の将来的展望について述べています。

寄稿していただいた先生方に、この場を借りてお礼申し上げます。また、Jill Emma Strothman 先生には英文目次のネイティブチェックという編集協力をいただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

二、事務局便り (メールアドレス seishin@min.ac.jp)

①入会案内 入会を希望される方は「身延山大学仏教学会会則」を熟読の上、事務局(庶務)までご連絡ください。メール

添付にて「身延山大学仏教学会入会申込書」を送らせていただきますので、必要事項を記入し、メール添付または郵便にて送付してください。

②購入案内 『身延論叢』 及び 『棲神』（第二十八号以降）のバックナンバーの購入を希望される方は、事務局（会計）までご連絡ください。一冊につき三、一八〇円（スマートレター料金を含む）でご購入いただけます。

③原稿募集 投稿を希望される方は『身延論叢』投稿規定」を熟読の上、編集委員までご連絡ください。

(1)応募期限 原稿の種類・題名を七月末日までに編集委員にお申し出ください。

(2)投稿締切 投稿は随時受け付けますが、最終締め切りは十月末日（厳守）とさせていただきます。

本学の四六五年、本誌の一〇八年にも及ぶ歴史を正しく継承し、向後も、弛まず勤しんでおられる方々の結実を披露する場として活用できますように努力いたす所存でございます。会員各位のご寄稿を心よりお待ちしております。今後とも何卒旧倍のご交誼ご叱正を賜りますようお願い申し上げます。

編集委員 金 炳坤 桑名法晃